慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | バークリーはイギリス経験論の異端児か：<br>ダブリンの実験哲学というコンテクストからの再考 |
| Sub Title | Is Berkeley an outsider of 'British empiricism'? : a reappraisal in the context of the experimental philosophy in Dublin |
| Author | 中野, 安章(Nakano, Yasuaki) |
| Publisher | 三田哲學會 |
| Publication year | 2017 |
| Jtitle | 哲學 No.139 (2017. 3) ,p.51- 77 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | The historiographical category of 'British empiricism' consisting of Locke, Berkeley, Hume, has been frequently attacked as a 'myth'. In particular, the traditional view of Berkeley as the philosopher connecting Locke and Hume has been called into question. This paper reconsiders Berkeley's place in the canon in terms of a broader intellectual context in which the traditional association of Locke and Berkeley may be restored.<br>The key term in my reappraisal is 'experimental philosophy'. Starting from Stephen Gaukroger's recent suggestion that Locke's empiricism is best interpreted as a philosophical refinement of the seventeenth-century experimental philosophy, I argue that Berkeley can be seen from a similar perspective. While Gaukroger denies continuity between Locke and Berkeley, I oppose this assessment by highlighting Berkeley's connection with the Dublin Philosophical Society (DPS). I suggest that the dissemination of experimental philosophy from England to Ireland provides important background to the Locke-Berkeley connection. Then I will look at how William Molyneux, the founder of the DPS, saw Locke's achievement ; he observed in the Dioptrica Nova that the Essay provided a new logic significantly advanced by the experimental method. Lastly, I argue that Berkeley's New Theory of Vision can be read as a practice of experimental philosophy. I will observe that Berkeley's New Theory, which uses the language analogy as the general explanatory framework, is an application of Locke's semiotic study of 'the understanding' to the case of vision. And by looking at his treatment of the Barrovian case, I will clarify how his study of vision follows the method of experimental philosophy. |

| Notes | 投稿論文 |
| --- | --- |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000139-0051 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# バークリーはイギリス経験論の異端児か

## ――ダブリンの実験哲学というコンテクストからの再考――

中　野　安　章*

# Is Berkeley an Outsider of 'British Empiricism'?: A Reappraisal in the Context of the Experimental Philosophy in Dublin

*Yasuaki Nakano*

The historiographical category of 'British empiricism' consisting of Locke, Berkeley, Hume, has been frequently attacked as a 'myth'. In particular, the traditional view of Berkeley as the philosopher connecting Locke and Hume has been called into question. This paper reconsiders Berkeley's place in the canon in terms of a broader intellectual context in which the traditional association of Locke and Berkeley may be restored.

The key term in my reappraisal is 'experimental philosophy'. Starting from Stephen Gaukroger's recent suggestion that Locke's empiricism is best interpreted as a philosophical refinement of the seventeenth-century experimental philosophy, I argue that Berkeley can be seen from a similar perspective. While Gaukroger denies continuity between Locke and Berkeley, I oppose this assessment by highlighting Berkeley's connection with the Dublin Philosophical Society (DPS). I suggest that the dissemination of experimental philosophy from England to Ireland provides important background to the Locke-Berkeley connection. Then I will look at how William Molyneux, the founder of the DPS, saw Locke's achievement; he observed in the *Dioptrica Nova* that the *Essay* provided a new logic signifi-

* 学習院大学

cantly advanced by the experimental method. Lastly, I argue that Berkeley's *New Theory of Vision* can be read as a practice of experimental philosophy. I will observe that Berkeley's *New Theory*, which uses the language analogy as the general explanatory framework, is an application of Locke's semiotic study of 'the understanding' to the case of vision. And by looking at his treatment of the Barrovian case, I will clarify how his study of vision follows the method of experimental philosophy.

## 序

「イギリス経験論（British Empiricism）」というカテゴリーが哲学史の記述に定着して以来，既に一世紀以上が経過している[1]．しかしいまやこのカテゴリーは，絶えざる異論に晒され続けたために，もはや信奉者を見出し難くなったとさえ言えるかもしれない．ロック，バークリー，ヒュームという三人の哲学者が，核となる共通の経験論テーゼで結ばれ，一つの学統に似た発展的継承関係を形作る，という系譜付けは，ここ半世紀ほどの間に，既に有効性を失った「神話」であるという扱いを受けるに至っている[2]．中でも「経験論者」としてのバークリーの位置は，最もしばしば疑惑の目を向けられてきたと言ってよい．

本稿の目標は，とかく経験論の異端児的扱いを受けがちであったバークリーを再びイギリス経験論の系譜中に，ロックの積極的な継承者として位置づけうる視点を示すことである．しかしこれは，必ずしも従来の指定席の真ん中にバークリーを据え直すことを意味するわけではない．むしろ，本稿を通じて明らかにしたいのは，バークリーは，ロックとヒュームという両端を繋ぐ直線の真ん中の点というよりは，一部分が重なり合った三つの円のうちの，一つの面上に位置を占めると理解する方がはるかに適切だということである．そして，それら円のひろがりを作り出すのは新科学運動，中でもイングランドを中心に広がった，実験哲学という自然研究のあり方を推進する運動である．バークリーは，この実験哲学を理念に掲げる

科学協会，「ダブリン哲学協会」に参加した人々と深い関わりをもっていた．ロックからバークリーへの影響関係も，イングランドからアイルランドへの実験哲学運動の伝播と，そこでの『人間知性論』の受容という，より広いコンテクストの中で理解されねばならないであろう．

最近のロック研究では，ロックの経験論哲学の起源を17世紀後半の自然哲学の変化，とりわけイングランドにおける実験哲学の出現と連携したものとして読み解く試みが現れてきている．こうした方向でのロック解釈を代表するのはゴークロジャーであり，近代科学文化の興隆と変遷を描く大著の中でロックの経験論の起源について次のような見方を提示した．「ロックを自然哲学者として読むことによって，経験論の一つのあり方――17世紀の実験哲学（experimental philoosphy）を受け継ぎ，哲学的に洗練するものとしての経験論―に光が当たることになる．この経験論は，自然哲学の実践と緊密に結び付いており，〈合理論・経験論〉論争が帰着するあの思弁的認識論とはまったく別である」[3]．実験哲学に基づく自然研究を推進していたのはロンドン王立協会であり，ロックが目指したのは彼自身がその活動に参与した王立協会の実験哲学の実践を，哲学的に擁護する企てにほかならなかったとゴークロジャーは見るのである[4]．

ここに述べたようなロック解釈の方向は，細部では議論の余地があるにせよ大枠では，つまりイングランド実験哲学の興隆からロックの経験論を理解するという点では，正しいと思われる．それはまた，王立協会という知的共同体の役割を重視する点で，イギリス経験論の意義をカノン中心主義でない視点から評価し直すための立脚点にもなると言えるだろう．ところが問題は，ゴークロジャーがロックを実験哲学の文脈から理解すべきことを主張しながら，バークリーについてはまったく異質な出自をもつと見なしていることである．それによれば，バークリーは「主としてマルブランシュに負う体系的な形而上学者」であり，この観点から例の経験論の三人組は「完全に誤解に導くもの」だと言われる[5]．しかし本稿が示したい

のは，このような判定が歴史的コンテクストから見ても，テクスト解釈としても，維持しがたいということである．

第一節では，ロンドン王立協会と緊密な情報網で結ばれながら，実験哲学を標榜する科学協会がダブリンに存在しており，バークリーがその中心人物たちとの人間関係の中で第一歩を踏み出したことを見る．第二節は，この科学協会の精神的支柱であったモリニューが実験哲学の方法論をいかに理解し，そして実験哲学とロックの『知性論』をどのように結びつけて見ていたかを検討する．そこから明らかになるのは，モリニューがロックの『知性論』の意義について，実験哲学の方法を人間知性の研究に拡張することを企てたものとして評価したということである．最後に第三節は，バークリーの『視覚新論』がそのようなモリニューの実験哲学やロックに対する見方を受け継ぐ形で知性探究を試みたものとして解釈できることを示したい．すなわちバークリーの『視覚新論』は，ロックの『知性論』から人間知性の「記号学」的な探究という理論的枠組みを受け取りつつ，モリニューの提起した視覚の具体的問題を素材にして，実験哲学の方法に従った知性研究をおこなったものだったのである．

## 1. ダブリンの新科学運動とバークリー

ダブリン哲学協会は，それが範をとったロンドン王立協会に比べるなら，今日ではほとんど忘れ去られた学術団体であり，研究の数も少ない[6]．しかし，その歴史的意義は決して小さいとは言えない．新科学の推進を掲げたこの協会は 1683 年から 1708 年までの間，およそ 25 年にわたって存続したが，しばしば中断を挟んだために実質的な活動期間は短く[7]，またロンドンと違って科学史上の著名人を抱えていたわけでもなかった．その中心にあったのは，ロックとの交友で知られるウィリアム・モリニュー，その弟で医者のトマス・モリニュー[8]，ウィリアムの息子サミュエル・モリニューである．ダブリン哲学協会の設立者となり，かつ存続させる力と

なっていたのは，ウィリアム・モリニューであり，したがって1698年に彼が没した後は，事実上その活動を終えていた．しかしこの科学協会の余韻は18世紀初頭まで残っており，バークリーはその余韻の中で思想形成をおこなうことになる．フェロウ選抜試験を通過して，『視覚新論』『知識の原理』の構想を練り始めた1707年夏のバークリーは，この哲学協会に参加した人たちの間にいた．この年サミュエル・モリニューが復活させたダブリン哲学協会で，彼はその知的キャリアの第一歩を踏み出すことになる．

ウィリアム・モリニューは，新科学を受容した知的共同体をダブリンに出現させ，学術的にも後進国であったアイルランドの知的風景を一変させるいわば触媒の役割を果たした点で，17世紀のアイルランド精神史において特筆すべき人物である[9]．彼とロックの間の書簡を通じた交友関係は，自著の『新屈折光学』（1692）をロックに献本したことに始まるが，これは彼の晩年に当たる出来事であり，それ以前に光学者・天文学者・自然誌家として長い経歴をもっている．モリニューの知的経歴は，彼が母校トリニティ・カレッジで受けた，伝統的なスコラ教育カリキュラムへの反発から始まっており，その代わりに課外の読書を通じてデカルトやベイコンの著作に親しみ，設立間もないロンドン王立協会の『会報』を熱心に読んでいった．この時代の彼の学友には，後述するように彼とともにダブリン哲学協会の両輪となるセントジョージ・アッシュがいた[10]．ちなみにアッシュは，後にバークリーを聖職に叙任し，その子息の大陸旅行に彼を随行させるなど終生バークリーと親交をもち続けた人物である．

ダブリン哲学協会はウィリアム・モリニューが発起人となり奔走して1683年10月15日に最初の会合を開き，翌84年1月に「自然の知識，数学，機械学の促進を目的とするダブリン協会」という名称の下で，14名の会員（翌年33名）が集まり[11]，正式に発足した．設立当初の代表的なメンバーを挙げれば，モリニュー兄弟のほか，当時フェロウだったアッ

シュ，学長ロバート・ハンティントン[12]，前学長ナーシサス・マーシュ[13]，ウィリアム・ペティである．ペティはウィルキンズのオックスフォード実験哲学クラブに加わり，さらにロンドン王立協会の設立時のメンバーとして既に名声を確立し，ダブリン哲学協会にとってはシンボル的存在と見なされていた．したがって，1684 年 11 月からはペティが初代総裁に選出されるとともに，彼の手を通じて読書や討論よりも実験と記録を主任務とする理念を一層鮮明に打ち出した会則が新たに起草された．こうして，ロンドン王立協会からおよそ二十年遅れて誕生したダブリン哲学協会は，ロンドン及び同時期にできたオックスフォードの哲学協会との間で継続して議事録を交換し，新科学の促進という目標を共有する情報ネットワークを形成した．その初期の通信業務にあたったのは秘書となったウィリアム・モリニューであり[14]，さらにライデンに滞在中のトマス・モリニューはホイヘンスやベイルと接触し，書簡を通じて彼の集めたヨーロッパ大陸（特にオランダ）の学術動向が定期的にもたらされた．

こうして新規に発足したダブリン哲学協会という知的共同体であるが，そのメンバー構成や会合場所から見ても，トリニティ・カレッジという旧来の教育・学術機関と深く結びついていた．すなわちモリニューをはじめ会員の多くは，トリニティ・カレッジの卒業生やフェロウ，歴代学長など大学関係者であったし，会合は大学内の学長公邸もしくは大学近傍で開催されていた[15]．このことがやがて伝統的論理学や形而上学に支配されていた大学教育[16]にも積極的波及効果をもたらすことになる．ウィリアム・モリニューがロックとの交友を始めた 1692 年に，その同じ年に学長を務めることになったアッシュが，モリニューに薦められて読んだ『知性論』に感銘を受け，以後これを学部教育課程における必修に課すことを決定したのである[17]．このようにダブリンでは，新しい科学共同体の活動が根付く過程でその共同体が掲げる理念に呼応するものとしてロックの哲学が歓迎され，旧来の教育カリキュラムの変革をもたらすに至ったのであり，こ

の経緯はバークリーを理解する上でも重要な鍵となるはずである．

バークリーがトリニティ・カレッジに入学するためにダブリンに出てきたのは，1700年のことである．このとき，ウィリアム・モリニューは二年前に世を去っており，ダブリン哲学協会も1698年以来，活動をまったく停止していた．しかし学部生のバークリーは，モリニューの盟友アッシュが導入したカリキュラムに従ってロックの『知性論』を読み（但し当時の学長はピーター・ブラウン[18]），やがてモリニューの家族と個人的な繋がりをもつに至る．1705年にモリニューの遺児であるサミュエルが入学すると，バークリーはチューターとして指導することになっただけでなく[19]，両者は1706年1月に自然研究を目的の一つに掲げる学生クラブを立ち上げ[20]，バークリーは自然誌に関するエッセイ（キルケニー近郊ダンモア渓谷にある洞窟の報告）を，その最初の会合で発表する[21]．1707年にフェロウ選抜試験を控えてバークリーは数学に関する小論を三つ出版するが，これらのうち一つはサミュエル・モリニューに献じられた．そしてバークリーが試験準備に専念する間，サミュエルはダブリン哲学協会の復活に向け各方面に働きかけ始める．これには，バークリーと協力で主催したこの小さなクラブが一つの契機になったという推測も成り立つだろう．

こうして1707年8月に，まだ学部生のサミュエルが秘書となり，旧メンバーに新規参入の若いメンバーが合流して，ダブリン哲学協会は復活した．以前に名誉革命の混乱期にも中断したのでこれが二度目の再生だが，翌年初夏までに解散してしまう[22]．しかし結局は短命に終わったとはいえ，この最後の活動では1707年4月から翌年12月までアイルランド総督の任にあったペンブルックを総裁に戴き[23]，マーシュとウィリアム・キング[24]という二人の大主教を副総裁とし，トリニティ・カレッジ学長のピーター・ブラウンを含む役員を選出するなど，アイルランドの政治・宗教・学術の中枢を担う人々が臨席した．そして，6月にフェロウに選出されたばかりのバークリーは，こうした重鎮たちの前で1707年11月19日に

「無限について」という発表をおこなった．この発表は，ロックの『知性論』の強い影響を示している．それは，観念を伴わない記号は無意味だというロック的前提から出発し，無限小の観念は不可能であるから，それに関する数学者たちの推論や論争は無意味であり，また無限小は解析学に必要なものでもない，という結論を導き出すものであった[25]．

## 2. モリニューと実験哲学の理念

以上，バークリーが最初の思想形成期に，いかにイングランドの新科学運動をダブリンに移入した哲学協会の人間関係のうちにあったかを見た．バークリーの哲学が，単純にロックとの一対一の対話から生まれたのではなく，こうした新科学の普及とそれを推進する社会的ネットワークの形成というコンテクストが決定的に重要な役割を果たしたことは十分に明らかである．今後はおそらく，17 世紀後半のアイルランドにおけるダブリン哲学協会の思想的・社会的役割と 18 世紀に及ぶその影響をたどり，その中にバークリーの位置を見定めることも必要な作業になってくるであろう[26]．しかしここではむしろ，この哲学協会の精神的支柱であり，ロックと親交を結んだウィリアム・モリニューに注目して，ダブリンの新科学運動を背景としてロックの『知性論』がどのような観点から受容され，バークリーに影響を与えたかを探っていくことにしたい．

ダブリン哲学協会で実験哲学の理念がいかに理解されていたかを端的に示すのは，モリニューの『新屈折光学』冒頭を飾る「著名なる王立協会への献辞」である．ここでモリニューは，「イングランドの哲学者たちの高貴な集まり」において実践されている「実験哲学の優れた方法」について自身の理解するものを述べている．それによれば，いまやロンドン王立協会を範としてヨーロッパ中に普及しつつある自然研究のあり方は，「言葉の論争」に終始した不毛な学とは訣別し，まったく別な方法論的理念に従うに至った．トリニティ・カレッジのスコラ的「論争」形式による教育課

程を想起しつつ，モリニューはこの変革を自らの知的遍歴で味わった解放と重ね合わせる．新しい実験哲学の運動は，「暗い霧を晴らし，この種の空虚な言葉の寄せ集めを捨て去った」のであり，もはや自然の探究者は「知識の堅固な基礎を求め，十分な証拠（good Proof）が見出しうる以上には信じない」[27]．そして，ここで言われる「十分な証拠」とは「実験」であり，「自然哲学は観察と実験とその記録（Observation, Experiments, and History thereof）によって進められる」のである[28]．

それでは自然哲学の新しい方法としての「観察と実験とその記録」について，モリニューの解説をもう少し詳しく見よう．モリニューによれば，自然哲学の目標とは「自然的物体の性質と変様」，「性質と用途（Uses）」についての知識を獲得することにある．これに対して，「性質の真の理由あるいは原因（the True Reasons or Causes）を特定する」ことは，目標には含まれない．なぜなら，

> 全能な宇宙の作者は極めて微細な発条と隠された運動を用い，解明できない仕方で自然の働きをおこなうので，人間は現生でその内奥の知識に達することはきっと望みえないだろう．したがって，我々は明らかな事実の考察で満足しなければならないのであり，この事実という点では欺かれるということはありえない[29]．

ここで自然の「内奥の知識（intimate knowledge）」と対比される「明らかな事実（plain matter of Fact）」を，モリニューは「感覚に提示される現れ」「結果」とも言い換える．また，後の箇所では，「明らかな事実」を「実験と試行の事柄（Matters of Experiment and Tryal）」とも言い換えている[30]．したがって，物体の性質や用途について観察と実験によって知るとは，感覚を物体に実際に適用し（そこには身体を直接に適用させるだけでなく，『新屈折光学』におけるようにレンズなどの光学機器を媒介さ

せることも含まれるであろうが）その都度結果として現れる限りでそれらを知ることを意味するだろう．

上に見た献辞でモリニューが「実験哲学」の方法論を特徴づけるために特に対照させている自然探求のあり方が二つある．その一つは「多弁すぎる哲学（verbose Philosophy）」，もう一つは，原因の探求である．前者は，伝統的哲学すなわち「アリストテレス注釈者たち」のやり方で，共感や隠れた性質などの様々な自然的原因についての「仮説的推測を，気の利いた修辞を弄した論証で三段論法の形式に従って確証し，自然学を耳障りな論争で満たした」．しかし，既に見たように，モリニューの理解する実験哲学は，こうした言葉による原因の探求に代えて，観察と実験という方法によって原因を探求しようとするものでもない．むしろ，実験哲学は原因の探求に対して抑制的でなければならないとされる．モリニューは，ある現象ないし結果について，その直接的な原因に関する「仮説（Hypothesis or Supposal）」を立て，原因の探求を漸進的に進めることもできると認めるが，そこでの彼の強調点はむしろ，いかなる仮説であれ「疑いない十全な原因」としては確立されず，自然哲学はそうした仮説的探求なしで観察と実験だけで前進しうるという点にある．すなわち，「我々が用い，感覚に対して明示して見せる実験（the Experiments we use and demonstrate to sense）こそが疑いえない真理であり，自然の知識のそれだけ［実験が為されただけ］多くの進歩の足場になる」ことを強調するのである[31]．

このように伝統哲学の不毛性を糾弾し，原因の探求に抑制的で，観察と実験と自然誌こそ自然哲学の真の方法であると推奨するのは，ロンドン王立協会のヴァーチュオーソたちが共有し，グランヴィルやスプラットなどの擁護者たちが喧伝した理念であって，モリニューは忠実にそれを復唱しているのである[32]．しかし，モリニューの「献辞」で興味深いのは，出版されたばかりのロックの『知性論』[33]を，王立協会の掲げる実験哲学に繋げて評価している点にある．

> いまや論理学は，以前にあった姿とは異なる相貌をもつようになった．『思考の技法』『真理の探求』の中に見える論理学の姿は，スミグレティウスや，アリストテレスの注釈者たちの中に見られるものと，どれほど違うことだろうか．しかし，哲学のこの部門の偉大な進歩において，我々が最も多くを負うのは比類ないロック氏に対してである．彼の『人間知性に関する試論』は広く受け入れられた誤謬を正し，知識を前進させていく上で人間の心を導くための（私はそれを論理学と呼ぶのが適切だと思う）実験と観察によって確立された…深遠な真理を知らせてくれた[34].

つまり，モリニューによればロックの『知性論』は，スコラ式論理学の伝統を破ったアルノー・ニコルやマルブランシュの始めた，新しい論理学の系譜上にあるものというだけでなく，「実験と観察」という方法を適用することによって最大の進歩を成し遂げた点に，その画期的な特徴がある．

この新しい論理学は，（伝統的論理学が専心するような）正しい推論形式よりは，むしろ人間の知性能力そのものを研究し，真理探求のための知性の正しい導き方を指示することに主たる関心を置くものであることから，「能力論理学」，あるいは「観念の論理学」と呼ばれてきた[35]．そしてここで注目すべき点は，モリニューが「実験哲学」による「論理学」の刷新を語り，ロックの『知性論』にその実現を見ているということである．つまりモリニューによれば，ロックの成し遂げたことは，外的自然の探求として進められてきた実験哲学の実践を知性能力の探究にまで応用したことにあったのである．以下で示したいのは，バークリーもまた，その最初の哲学的著作である『視覚新論』で，そのような実験哲学の応用としての知性探究に取り組んでいたということである．

## 3.　実験哲学的な知性探究としての『視覚新論』

『視覚新論』を知性能力の探究として，しかも実験哲学に基づいた知性

の研究として読むという提案は，やや唐突の感を与えるかもしれない．というのも，この著作には翌年の『知識の原理』で全面的に展開される非物質論を部分的に（視覚に関してのみ）提示したものという位置づけがしばしば与えられてきたからである[36]．しかし，本報告のスタンスは，非物質論や観念論はとりあえず脇に置いた上で『視覚新論』をそれ自体で独立した著作として見るべきであり，『原理』ないし『三対話』からの読み込みを排除して読み解く努力が必要だというものである．このことをまずは確認した上で，『視覚新論』が実験哲学的な知性探究とどのように結びつくかを，以下で検討してみよう．

最初に，知性探究の理論的枠組みという点で，バークリーがロックと連続性をもつことを確認したい．ロックの『知性論』は知識論を含むが，まず何よりも知性探究の試みであり，「記述による平明な方法（historical, plain method）」に従って，知性の対象である観念の起源を探求し，それらが経験からいかにして得られるのかを示そうとする．このような発生論的，記述誌的な方法に従ったロックの知性探究のプログラムの核心にあるのは，第二巻に見られるような，単純観念の経験的起源と，そこからの能動的な複合観念の構成に関する詳細な考察にあることは改めて言うまでもないだろう．しかし，ロックによる知性の記述誌は，同時に一定の理論的枠組みの中でなされているのであり，ロックはそれを重要な箇所で表明している．第 2 巻 21 章の「能力について」論じた箇所で，ロックは知性を「知覚の能力」と規定し，この知覚をさらに次の三種類に区分した．「1．我々の心の中にある観念の知覚，2．記号の意味表示の知覚，3．観念の間にある結合あるいは背反，一致あるいは不一致の知覚」（2.21.5）である．これら知覚の三種類は，『知性論』の第二巻（観念），第三巻（言葉），第四巻（知識と蓋然性）にそれぞれ対応する．

いま注目したいのは，ロックが知性を知覚能力として捉え，その対象として観念とともに，記号の意味表示を挙げている点である．ここでの「記

号」は，必ずしも言葉だけを指すと取る必要はないだろう．というのも，『知性論』末尾に見られる学の分類では，自然学，倫理学に続く第三の学として「記号学」が挙げられ，それは「知識の大切な道具としての観念と言葉を考察する」ことを目標とするとされるからである[37]．そして，幾つかの研究が示唆するように，ロックの『知性論』は観念と言葉の両方を包括するものとしての「記号学」を実践するものとして解釈できる[38]．この観点からの知性探究は，観念と言葉について考察し，さらに観念と言葉の両方を「記号」と捉え，それら記号の意味表示を考察することを目指すものということになる．もしこのようにロックを理解できるとすれば，『視覚新論』と『知性論』との連続性は，従来考えられたよりもずっと見て取り易いものになるであろう．

『視覚新論』の中心テーゼは，視覚観念が習慣によって触覚観念を表示する「記号」となり，この記号表示の機能によって距離や大きさや位置，形，運動などの空間的性質の知覚が成り立つというものである．バークリー自身の言葉を引けば，視覚対象は「自然の普遍的言語」であり，「視覚対象が離れた場所にある対象を我々に表示し，それら対象のしるしとなる仕方は，人間の取り決めによる言語や記号がそうする仕方と同じである」(147節)．『視覚新論』全体を貫くこの「視覚＝言語」のアナロジーも，実はロックにその原型が見られる．『知性論』第2巻9章の第8節は，第二版でモリニュー問題が付け加えられた箇所であり，ここでは「感覚の観念がしばしば判断によって変えられる」ことが論じられる．そしてロックは，判断による観念の変更を伴う知覚が特に視覚に見られる現象であると言い，それを「言語」のアナロジーを使って説明する．例えば，多様な陰影をもつ丸い平面の観念が，習慣的になされる判断を通じて一様な色の球体の見えに変えられ，平面の観念には我々は気づかない．これは「注意深く理解して読んだり聞いたりする人が，文字や音にほとんど気づかず，文字や音が喚起する観念にだけ注意するのと同じである」(2.9.9)．

以上のように，ロックが『知性論』の中で知性を観念と記号表示を知覚する能力として規定し，そして視覚を言語のアナロジーで捉えたことを踏まえれば，バークリーの『視覚新論』は，視覚という特定の感覚を研究主題としながらも広くはロックの企てた知性探究というジャンルと強い連続性をもつものであると考えてよいであろう．言い換えれば，バークリーの『視覚新論』はロックの創始した知性についての「記号学」的探究の，視覚に関するケース・スタディとして読むことができる．こうして知性探究の試みという点でのバークリーとロックの連続性は確認したので，次に『視覚新論』がどのように「実験哲学」の実践と見なしうるかについて，見てみよう．

『視覚新論』が，その探究の理論的枠組みにおいてロックに負うとすれば，具体的な研究課題を与えたのはモリニューである．この論考は，「我々が距離，大きさ，位置を知覚する様式」と「視覚と触覚の観念の間にある相違」の考察を目標とする（1節）が，前の課題はモリニューの『新屈折光学』から，また後の課題はモリニュー問題から，それぞれ検討すべき題材を受け取っている．モリニュー問題と『視覚新論』の関係は，既によく知られている．しかし距離，大きさ，位置の知覚に関してバークリーが解決を試みる三つの難問，すなわちバロウ問題，月の錯視問題，網膜像倒立問題が，モリニューの『新屈折光学』におけるそれらの問題の考察（但し，月の錯視については『王立協会会報』の掲載論文）に解答を与える試みであることはほとんど注意されてこなかった[39]．そしてこれら出版物でモリニューが取り組む問題は，最初ダブリン哲学協会で発表され，他の科学協会との間でも意見交換がされたものであった[40]．

しかしバークリーは，こうした視覚論の具体的諸問題においてのみならず，その方法論的扱いにおいてもまた，実験哲学の実践を意図していたと言える．とはいえ，これから見るようにバークリーは，モリニューを批判しつつ自身の新しい解決を与えようとする．またバークリーは，モリ

ニューが『新屈折光学』献辞で述べたような，単なる「観察と実験とその記録」という自然誌に止まることなく，視覚現象を説明する「原理」を求め，したがって明確に「理論」を志向する[41]．このことは，「視覚の新理論へ向かう（towards a New Theory of Vision）試み」というタイトルそのものから，十分窺える通りである．

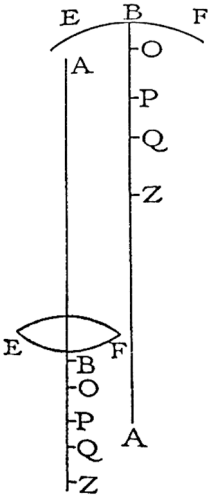
先に見たように，『視覚新論』の理論的枠組みは「視覚＝言語」のアナロジーであり，これが視覚と触覚の観念の「習慣的結合」を軸として発展させられていく．距離の知覚で言えば，視覚に伴うある感覚（眼の緊張感，ぼやけた見え）と，触覚によって知覚される一定の距離の間に規則的随伴を観察することから，それらが習慣的に結合し，視覚観念から距離が示唆されるようになるが，それは「ちょうどある特定の音［言葉］を聞いて，習慣がその音と結びつけていた観念が，直ちに知性に示唆されるのと同様である」（17, 21節）という具合に，言葉の意味表示とのアナロジーが適用される．『視覚新論』におけるバークリーの目標は，この習慣的結合を視覚の真の「原理」として確立することであり，それが言語とのアナロジーによって内容豊富にされ，説明を与えられるゆえに，彼はそれを「視覚言語の理論（Theory of Visual Language）」と呼ぶ[42]．

しかし，もちろんこのようなアナロジーの適用は，それ自体で習慣的結合の原理を正当化するものではない．それでは習慣的結合を視覚の説明原理として正当化するものとバークリーが考えたのは，何であったか．それは実地経験，すなわち「実験」であり，ここに『視覚新論』の実験哲学たるゆえんがある．いま距離知覚のセクションにのみ注目するが，第4節から第28節で習慣的結合が一般的原理として述べられた後で，29-40節では「バロウ問題」が扱われる．これは距離の錯視現象に関するものであり，アイザック・バロウが『光学講義』で言及して有名になり，モリニューが『新屈折光学』で紹介した問題である．バークリーがこの問題を取り上げた意図は，それが実際の経験的事実を通じて彼自身の習慣的結合

原理の妥当性と，光学者たちの幾何学的原理の失敗とを，劇的な形で対比することを可能にするからである．

バロウやそれに先行する光学者，またモリニューも含めて受け入れていた説によれば，我々が眼からかなり近い場所に置かれた対象の距離を知覚するのは，「光点から発して瞳孔に入る光線の拡散」が多いか少ないかによってであるとされていた．この説明のポイントは，光線の拡散の程度の違いという幾何学的手段に従って対象がどの距離に見えるかを計算し決定できる点にある．つまり，対象が近づくと光線の拡散が大きくなるので対象は近くに見え，遠ざかるほど拡散は小さくなるのでより遠くに見える．ところがいま，対象と眼の間に凸面レンズを置き，対象からの光を眼の手前で屈折させると，光線は収束して眼に入ってくる．ここで「収束」は「拡散」の逆であり，光の拡散が極めて小さい場合として理解できるから，上述の幾何学的原理に従って推論すれば，対象は非常に遠くに見えるはずだと結論される．しかし「経験」が示すところでは，この場合，対象は実際に置かれた距離よりも近くに見えるのである．

ここで露呈されているのは，数学的推論と実験的事実との間の齟齬である．そして幾何学的原理がこの実験的事実と整合しないなら，一般的な原理としての妥当性が疑われねばならない．ところがバロウも，またモリニューも，この現象が「ある奇妙で特殊なケース」に属すると見なして，受け入れられた原理を放棄する必要はないと結論した[43]．これに対してバークリーは，習慣的結合の原理（ここでは，ぼやけた見えはより近い距離と習慣的に結合している，という原理）が問題の実験的事実ともうまく整合することを，次のように示そうとする．




(1) この［バロウ問題の］現象が我々の説といかに適合するかを見よう．先に掲げた図［左図］で，［対象が点Aの位置にあるとして，］眼が点B［レンズに接する点］の近くにあるほど，対象の見えはよりはっきりしている．しかし眼が点Oに後退するにつれ，見えはぼやけてくる．そのようにして，眼がついにZまで引き戻されると，対象は最もぼやけて見える．

(2) 21節［ぼやけとより小さな距離の習慣的結合を述べた節］によれば，眼が点Bから後退するにつれ，対象は眼に徐々に接近してくるように見えるだろう．すなわち，(その節で私が提案した原理の帰結として)，その対象は点Bよりも点Oで，より近くに見えるはずである．同様に，点Oよりは点Pで，また点Pよりは点Qで，より近くに見え，そうしてZにまで来るとついには消えてしまう．

(3) これは事実（the very matter of fact）であり，誰でも望むなら，実験によって（by experiment）自分自身で納得できる[44]．(31節)

(1) は，凸面レンズ（上図左）あるいは凹面鏡（上図右）から眼を離していく（すなわちBからZへと眼の位置を移動させていく）ほど対象がより一層ぼやけて見えるという，対象の視覚的な見えの変化について述べている．(2) は，バークリー自身の原理，すなわち習慣的結合原理から，対象の距離がどのように見えるかという予想を述べている．そして (3) は，この予想がレンズを用いて実地に経験される事実（matter of fact）と一致すること，つまり「実験によって」確証されるということを述べている．これと対照的に，光線の拡散による知覚という幾何学的な説明原理はこの実験的事実と整合しないのであった．

## 結び

以上の考察から，本稿が導き出したい結論は，次の二つである．

まず，バークリー哲学の誕生には 17 世紀アイルランドの知的伝統，とりわけウィリアム・モリニューが中心になって推進した実験哲学を掲げる科学協会の活動が，その本質的基盤となっているということである．最初に述べたように，これはロックの経験論哲学の起源に関する最近の研究動向と繋げれば，従来のロック・バークリー・ヒュームという，カノンの偏重に傾いた見方とは異なる視点から，「イギリス経験論」を評価し直すための出発点になる．

このことはまた，スコットランドだけでなくアイルランドをも含むブリテン科学文化の形成という，より広い文脈にバークリーを置き直すことにもなる[45]．実を言うと，ゴークロジャーがバークリーに関してのみ，実験哲学とは無縁の形而上学者として従来の異端児的扱いにとどめ置こうとしたのは，科学文化の興隆についての彼の解説が，依然としてフランス啓蒙を中心とした枠組みの中で展開されることと，無関係ではない．ゴークロジャーの見方では，18 世紀におけるロックの継承者はヴォルテールや百科全書派，そしてヒュームである．したがってフランス科学アカデミーや文芸共和国については詳しく論じられる一方，王立協会がどのようにブリテン諸島内部で新科学の情報ネットワークを築き，ダブリンにもそれが波及したかという点は，何も触れられない．しかしアイルランドでもロックの哲学がダブリン哲学協会の実験哲学運動が根付いていく過程で受容されたとすれば，アイルランドをも含み込む形で，より複雑なストーリーが科学的啓蒙の展開について語られる必要があるだろう[46]．

本稿の第二点は，バークリーの最初の哲学的著作である『視覚新論』は，知性探究の試みという点でロックの『知性論』と連続性をもっており，そしてロックから「記号学」という理論的枠組みを受け継ぎながら，実験哲学の方法に従って視覚を扱ったものとして読めるということであっ

た．これはおそらく，『視覚新論』の読み方としてかなり異論のあるものかもしれない．というのも，長らく支配的だった解釈によれば，バークリーが『視覚新論』を書いた動機は，視覚対象がすべて「心の中にある観念」であることを示すことにあり，それを『原理』では触覚を含む他の感官にも及ぼして，全面的な観念論の形而上学を打ち建てるための準備作業を意図したものと見られてきたからである[47]．

上の考察で明らかにしたかったのは，そのような解釈とは別のアプローチが可能だということ，そしてバークリーのテクストのうちには実験哲学の実践と理解できる議論が確かに存在するということである．もちろん，バークリーの哲学が最終的に目指す地点は，精神のみを観念の原因とする形而上学であり，神という原因についての考察であることは疑いえない．しかし，このことから彼の形而上学がロックの場合とは違って「実験哲学」と無関係であったとか，それに反対するものであったということにはならないだろう．事実，若き日のバークリーはノートの中に「実験哲学を大いに推奨し称揚すべきこと」（498）と記したのである．むしろ，バークリー解釈として実りある方向は，実験哲学を出発点にしながら，彼がそれをいかに神と精神の形而上学的な考察へと発展させていったかを問うてゆくことではないであろうか[48]．

## 注

[1] イギリス経験論，大陸合理論のそれぞれの系譜における三人組にカントを付け加えた形の「カノン」が，アメリカでいかに形成されたかを論じているのは，Kuklick 1984 である．日本における哲学史記述では，既に 1901 年（明治 34 年）に波多野精一『西洋哲学史要』に経験論，合理論の三人組が「カント以前の哲学」として記述されているのが見出される．

[2] イギリス経験論の「神話」あるいは「標準理論」に対する代表的批判は，Loeb 1981; Norton 1981 を参照．Loeb に対する批判は Ayers 1984, 2005.

[3] Gaukroger 2010, p. 98. ゴークロジャーが，ロック経験論の原型を与えた「実験哲学」として重視するのは，ボイルの気体論，シドナムの臨床医学，ニュー

トンの光学である．

[4] 同じく自然哲学における「実験哲学」の興隆という観点から，ロックの経験論の起源を考察するものとしては，Anstey 2005, 2011; 青木 2008, 2013 も参照．ゴークロジャーの解釈は，一世代前のロック解釈と比べて，同じように自然哲学というコンテクストの中にロックを置きつつ，それを「粒子説」の擁護とはせず「実験哲学」の擁護であると捉え，実験哲学は現象の基層原因に関する仮説や理論に積極的にコミットしないと見なしている点が注目される．ただし実験哲学と粒子説の関係は，これと異なった解釈も可能であろう．

[5] Ibid., pp. 156–7; p. 217.

[6] Hoppen 1970; Barnard 1972, 1974; Breuninger 2014; Hemmens 2015; Hunter 2015. 協会の会則，議事録，発表原稿が部分的に残っており，関連書簡とともに Hoppen 2008 に集成されている．最近の研究関心を刺激しているのは，疑いなくこの重要資料であろう．

[7] 1683 年 ～ 87 年，1693 年 ～ 98 年，1707 年 ～ 08 年．Hoppen 2008, vol. 1, pp. xx–xxi.

[8] トマス・モリニューは，オランダ亡命中のロックと 1684 年 10 月に会った．Simms 1982, p. 51. また兄と同時に 1692 年以後ロックと書簡を交わし，医学上の事柄で意見交換した．

[9] ダブリンへの新科学導入には，何人かの先駆者もいた．その一人，マイルズ・サムナーは，トリニティ・カレッジ数学教授であり，1640 年代後半からハートリブやボイルと通信し，新科学のための研究機関を模索していた．Hoppen 1970, p. 62. 特にダブリン哲学協会成立を準備したこの前史に注意を向けているのが，Barnard 1972, 1974 である．

[10] Simms 1982, p. 19. 後にハチソンの庇護者となるモールスワースも，彼の学友である．

[11] 1683 年から 1707 年までに加入したメンバー数は 84 名である．アイルランド出身者が半数を占め，職業別では聖職者が多いのが特徴である．Hoppen 2008, vol. 1, pp. xxi–xxiii.

[12] 著名なオリエント学者であり，シリアで遺跡調査をおこなった．ダブリン哲学協会ではオックスフォードとの通信窓口となり，エジプトのオベリスクに関する発表が残っている．Hoppen 1970, pp. 35–6; Hoppen 2008, vol. 1, pp. 192–8.

[13] Hunter 2015 は，マーシュとボイルの交流について論じている．

[14] モリニューが秘書を務めたのは 1684 年 1 月から 1685 年 5 月にかけてであり，その後はアッシュが 1686 年 5 月まで務めた．ダブリン哲学協会はこの期間に

最も生産的であり，現存する117の議事録のうちの大半が，この期間に属する．Hoppen 2008, vol. 1, p. 1–106.

[15] 設立当初はハンティントンの学長公邸で会合が開かれたが，やがて実験観測設備の充実を求めて大学前の大通り Dame Street 奥の敷地 Crowe's Nest に移った．Hoppen 1970, p. 71. この Crowe's Nest の来歴についての詳細は，Hemmens 2015, p. 60 を参照のこと．

[16] トリニティ・カレッジでの学部教育カリキュラムの詳細な記録は，1736年以降のものしか残っていないが，そこから17世紀後半から18世紀初めまでの様子も窺い知られる．McDowell & Webb 2004, pp. 45–9. また，Hoppen 1970, chapter 3 も参照．

[17] De Beer 1978, p. 601–2. アッシュは，学長就任以前は数学教授として，大学内でも数学や新科学の研究を奨励した．トリニティ・カレッジの数学教授職は前任者サムナーもそうだったように，大学における新科学の灯火のような役割を担っていた．Hoppen 1970, p. 64.

[18] 学長在任は1699年から1710年であり，1700年に入学したバークリーは彼から教授を受けたとも言われている．しかしブラウンは，ダブリン哲学協会での積極的な活動歴はない．

[19] ただし，このチュートリアルは大学の記録にはないので，ルースはモリニューに対するバークリーのチュートリアルは私的な性格のものだったろうと指摘する．Luce 1995, p. 45.

[20] この学生クラブの規約が，バークリーのノートブックを含む同じ文書群の四つ折り紙に記されている．それによれば8名のメンバーが毎週金曜日に集まり「どんな科学についてであれ，発見や新しい考え，観察」を話し合うとある．また同じ文書群の中にバークリーがこれとは別につくった学生クラブの規約も含まれており，これは毎週木曜に開かれて，そこではデカルトやロックを含めた「新哲学」が討議されていた．Luce 1995, p. 35.

[21] バークリーがこの洞窟を探検したのは7年前の1699年であり，このエッセイは記憶に基づいて書かれた．これはトマス・モリニューの手によって，王立協会『会報』に掲載するに適当なものとしてロンドンの総裁ハンス・スローンに送られたが，採録には至らなかった．Hoppen 2008, vol. 2, p. 721. 自然誌へのバークリーの関心はその後も持続した．後年ナポリに旅行した際にヴェスヴィオス火山に二度登頂し，その報告は1717年10月の『会報』（vol. 30, pp. 708–13）に掲載された．Luce 1995, p. 78; Berkeley 1948–57, vol. 4, pp. 247–50.

[22] 最初と最後の会合の正確な日付はわかっていないが，秘書や総裁その他10名

の役員を選出したのは 11 月 12 日である．サミュエルは 9 月の書簡では，既に「4, 5 回の会合」があったと述べている．Hoppen 1970, pp. 192–3; Hoppen 2008, vol. 2, p. 769.

[23] ペンブルック卿，トマス・ハーバートは，ロックから『知性論』を献じられ，バークリーからは『知識の原理』を献じられているが，興味深い暗合として，ロックから『知性論』を献じられた 1689 年には，ロンドン王立協会の総裁であった．当時まだ無名の若いバークリーがあえて自著をペンブルックに献じたのは，この事情を意識してのことかもしれない．後にバークリーはロンドンでペンブルックに紹介され，親交を結ぶ．Berkeley 1948–57, vol. 8, p. 58. なお，注目すべきことに，バークリーのノートブックには，「無限について」に対するペンブルックからの肯定的評価に謝意を述べつつ，彼自身の企てとロック『知性論』を結び付けていると思われる記述がある（396）．ルースの注（Berkeley 1976, pp. 226–9）も参照.

[24] *De Origine Mali*（1702）の著者として有名だが，協会の設立当初からの会員であり，農業技術改良に関わる分野で活発に発表をおこなった．Hoppen 1970, pp. 42–3, 152–4.

[25] ここでの議論は，後の『原理』123–32 節，『アナリスト』（1734）で発展される.

[26] ダブリン哲学協会が解散した後，1731 年にトマス・モリニューや，バークリーの学友であったプライアーやマッデンが中心となり，王立ダブリン協会（Royal Dublin Society, 現在まで存続）が設立される．この王立ダブリン協会とダブリン哲学協会の性格の違い，そして「アイルランド啓蒙」における両者の意義を，Breuninger 2014. が論じている．王立ダブリン協会へのバークリーの貢献については，Luce 1995, chapter XIII を参照.

[27] Molyneux 1692, Dedication, ii.（「献辞」は頁付がないので，献辞からの引用はすべて，最初の頁から i, ii, iii, … という番号を付しておこなう.）

[28] Ibid., v.

[29] Ibid., vi.

[30] Ibid. viii.

[31] Ibid., vi. 括弧（[　]）内は引用者による補足.

[32] 例えば，上に見たモリニューの論述と，Shapiro 2000, pp. 112–7 や青木 2008, pp. 66–7 に列挙されるグランヴィル，スプラット，フック，ボイルの言説を比較されたい.

[33]『新屈折光学』出版は 1692 年だが，「献辞」には 1690 年 4 月 17 日の日付が記されており，ロックの『知性論』の出版はその約 5 か月前の 1689 年 12 月で

ある．

[34] Ibid., iv.

[35] ロックの『知性論』及び『知性の正しい導き方』が，デカルトの創始した新しい論理学をいかに改訂，発展させ，それが18世紀に受け継がれていくかについては，Schuurman 2000を参照．他にも，Buickerood 1985; Winkler 2003; Serjeantson 2008の研究がある．知性能力の研究が「観念の論理学」になるのは，それが「観念の道」，すなわち知性が思考する際に携わる直接的対象は何であれ「観念」であるという前提を，採用するからである．また，『知性の正しい導き方』が「新しい論理学」の試みとしていかなる位置づけをもつかという点については，同訳書（1999）に付けられた，下川潔「訳者解説」も参照．

[36] Berkeley 1948–57, vol. 1. のルースによるEditor's Introductionを参照．

[37] 他にも観念の真偽を論じた重要な箇所で，「我々の使う記号は，観念か言葉のどちらかであり，これで心的命題か言辞的命題のどちらかが作られる」（2.32.19）と言われている．同じ章では，単純観念が対象を識別する「記号（Mark）」として語られる（14節）．このような観念＝記号という点は，特にAyers 1991, vol. 1, part1, chapter 7が論じている．

[38] 平野 1966; Serjeantson 2008; Anstey 2012.

[39] Molyneux 1688; Molynuex 1692, Part 1, pp. 105–6, pp. 113–21, Part 2, pp. 211–3.

[40] Hoppen 2008, vol. 1, pp. 335–97.

[41] ここで言う「原理（principle）」は，原因とは区別される．『視覚論弁明』では「視覚の研究が関心を向けるのは，我々が知覚する限りの対象」であって，「原因や力」は「感覚の対象であるとか，視覚についての科学の対象であるとは思えない」と言われている（18節）．

[42] 1733年の『視覚論弁明』のタイトルページ．

[43] Molyneux 1692, p. 119. ここでのモリニューの姿勢は，「献辞」で表明された実験哲学へのコミットメントと整合的でないように見えるし，また月の錯視問題に対する取り組みとも整合的でない．王立協会の『会報』でモリニューは，デカルトの説明（地平線の月は，間にある介在物と比較されるために大きいと判断される）に対して，様々な個別的反例を挙げてデカルトの解決の不十分さを示し，新たな説明の必要性を訴えていたからである．

[44] (1)(2)(3)の番号と，括弧［　］内の補足は，引用者によるもの．ここに掲げた図はバロウの『光学講義』末尾にあり，バークリーが『視覚新論』に転載したものである．

[45] ヒュームと「科学文化」の関わりはBarfoot 1990，実験哲学については

Demeter 2012 を参照．なお，バークリーからスコットランドへの影響をエディンバラの Rankenian club に関して考察したものとして，Stewart 1985 がある．また，ハチソンのアイルランド的出自を重視してスコットランド啓蒙への影響を論じているのは，Berman 2012 である．

[46] Porter 2000（chapter 1 & 6）はこの点で有益だが，アイルランドへの言及は限られる．最近刊行された Brown 2016 は，初めて「アイルランド啓蒙」を掲げ，この概念の正当性を論じる書物であるが，そこでもダブリンの実験哲学運動についてはほとんど論じられない．

[47] 逆に，『視覚新論』から『原理』『三対話』を解釈すべきことを提案したのはアサートンである．つまり『視覚新論』の意図は，観念が表象できるのは別の観念だけであるという「感覚表象の理論」を視覚に即して提示し，次の『原理』や『三対話』は感覚経験全体にそれを一般化することを目指したという解釈である．Atherton 1990, chapter 12.

[48] 本稿は，2016 年 3 月 29 日に学習院大学で開催された日本イギリス哲学会第 40 回研究大会におけるシンポジウム「イギリス経験論とは何なのか―「ロック，バークリ，ヒューム」の系譜」において読み上げた発表原稿に基づいている．シンポジウム報告の機会を与えて下さった青木滋之氏，会場でコメントをいただいた司会者の伊勢俊彦氏，一ノ瀬正樹氏，及び質疑に参加して下さったフロアの方々に，この場を借りて感謝の意を表したい．

## 文献表

青木滋之 2008.「実験哲学の認識論―フック，グランヴィル，ロック」，*Nagoya Journal of Philosophy*, vol. 7, pp. 3–18.

――― 2013.「ロック経験論のルーツ―実験哲学から経験主義へ―」，イギリス哲学研究　第 36 号，pp. 29–42.

Ayers, Michael. 1984. “Berkeley and Hume: a question of influence,” in *Philosophy in History: Essays on the Historiography of Philosophy*, eds. R. Rorty et al., Cambridge.

――― 1993. *Locke: Epistemology and Ontology*, Routledge.

――― 2005. “Was Berkeley an Empiricist or a Rationalist?” in *The Cambridge Companion to Berkeley*, ed. Kenneth P. Winkler, Cambridge.

Anstey, Peter. 2005. “Experimental versus Speculative Natural Philosophy,” in *The Science of Nature in the Seventeenth Century*, eds. Peter R. Anstey and John A. Schuster, Springer.

――― 2011. *John Locke and Natural Philosophy*, Oxford.

――― 2013. "John Locke on the Understanding," in *The Oxford Handbook of British Philosophy in the Seventeenth Century*, ed. Peter R. Anstey, Oxford.

Atherton, Margaret. 1990. *Berkeley's Revolution in Vision*, Ithaca: Cornel University Press.

Barfoot, Michael, 1990. "Hume and the Culture of Science," in *Studies in the Philosophy of the Scottish Enlightenment*, ed. M.A. Stewart, Oxford.

Barnard, T. C. 1972. "Miles Symner and the New Learning in Seventeenth-Century Ireland," *The Journal of the Royal Society of Antiquaries of Ireland*, Vol. 102, No. 2, pp. 129–142.

――― 1974. "The Hartlib Circle and the Origins of the Dublin Philosophical Society," *Irish Historical Studies*, Vol. 19, No. 73, pp. 56–71.

Berkeley, George. 1948–57. *The Works of George Berkeley, Bishop of Cloyne* (9 vols.), ed. A. A. Luce and T. E. Jessop, Edinburgh: Thomas Nelson & Sons.

――― 1976. *Philosophical Commentaries: Transcribed from the Manuscript and Edited with an Introduction and Index by George H. Thomas; Explanatory notes by A. A. Luce*, Ohio: Alliance.

バークリ，G. 1990.『視覚新論　付：視覚論弁明』，下條信輔，植村恒一郎，一ノ瀬正樹，鳥居修晃　訳・解説，勁草書房.

Berman, David. 2012. "The Birth of Scottish Philosophy from the Golden Age of Irish Philosophy," *Eighteenth-Century Studies*, Volume 45, Number 3, pp. 379–392.

Breuninger, Scott. 2014. "The Social Networks of the Irish Enlightenment: The Dublin Philosophical Society and the Royal Dublin Society," in *Social Networks in the Long Eighteenth Century: Clubs, Literary Salons, Textual Coteries*, Cambridge Scholars Publishing.

Brown, Michael. 2016. *The Irish Enlightenment*, Harvard University Press.

Buickerood, James J. 1985. "The Natural History of the Understanding: Locke and the Rise of Facultative Logic in the Eighteenth Century," *History and Philosophy of Logic* 6: 2, pp. 157–90.

De Beer, E. S. ed. 1979. *The Correspondence of John Locke*, vol. IV, Oxford.

Demeter, Tamás. 2012. "Hume's Experimental Method," *British Journal for the History of Philosophy 20: 3*, pp. 577–99.

Gaukroger, Stephen. 2010. *The Collapse of Mechanism and the Rise of Sensibility:*

*Science and the Shaping of Modernity 1680–1760*, Oxford: Clarendon Press.
平野耿 1966.「ロックの医学手稿」『白山哲学』第 4 号, pp. 88–111.
Hoppen, K. Theodore. 1970. *The Common Scientist in the Seventeenth Century: A Study of the Dublin Philosophical Society 1683–1708*, London: Routledge & Kegan Paul.
———— 2008 *Papers of the Dublin Philosophical Society 1683–1709* (2vols.), Dublin: Irish Manuscripts Commission.
Hunter, Michael. 2015. "Boyle, Narcissus Marsh and the Anglo-Irish Scene in the Late Seventeenth Century," in *Boyle Studies: Aspects of the Life and Thought of Robert Boyle* (*1627–91*), Ashgate.
Kuklick, Bruce. 1984. "Seven Thinkers and How They Grew: Descartes, Spinoza, Leibniz; Locke, Berkeley, Hume; Kant," in *Philosophy in History: Essays on the Historiography of Philosophy*, eds. Richard Rorty, J. B. Schneewind, and Quentin Skinner, Cambridge University Press.
Locke, John. 1975 (1690). *An Essay concerning Human Understanding*, ed. Peter H. Nidditch, Oxford.
Loeb, Luis. 1981. *From Descartes to Hume*, Ithaca: Cornel University Press.
Luce, A. A. 1992 (1949). *The Life of George Berkeley Bishop of Cloyne*, Routledge/Thoemmes Press.
McDowell, R. B., and D. A. Webb. 2004 (1982). *Trinity College Dublin 1592–1952: An Academic History*, Trinity College Dublin Press.
Memmens, Susan. 2015. "Crow's Nest and beyond: Chymistry in the Dublin Philosophical Society, 1683–1709," *Intellectual History Review*, vol. 25, no. 1, pp. 59–80.
Molyneux, William. 1692. *Dioptrica Nova* (*2 parts*), London.
———— 1688. 'Concerning the Apparent Magnitude of the Sun and Moon, or the Apparent Distance of Two Stars, when Nigh the Horizon and when Higher Elevated', *Philosophical Transactions of the Royal Society of London* 16, pp. 314–323.
Norton, David Fate. 1981. "The Myth of British Empiricism," *History of European Ideas*, vol. 1, no. 4, pp. 331–44.
Porter, Roy. 2000. *Enlightenment: Britain and the Creation of the Modern World*, London.
Schuurman, Paul. 2001. "Locke's Logic of ideas in Context: Content and Structure," *British Journal for the History of Philosophy 9: 3*, pp. 439–65.

Serjeantson, R. W. 2008 "'Human Understanding' and the Genre of Locke's Essay," *Intellectual History Review 18: 2*, pp. 157–171.

Shapiro, Barbara J. 2000. *A Culture of Fact: England 1550–1720*, Ithaca: Cornel University Press.

下川潔 1999「訳者解説」ロック『知性の正しい導き方』，御茶の水書房，pp. 191–233.

Simms, J. G. 1982. *William Molyneux of Dublin 1656–1698*, Blackrock: Irish Academic Press.

Stewart, M. A. 1985. "Berkeley and the Rankenian Club," *Hermathena* No. 139, pp. 25–46.

Winkler, Kenneth. 2003. "Lockean Logic," in *The Philosophy of John Locke: new perspectives*, ed. Peter R. Anstey, Routledge.